

エストニアでの驚き

この二月はソ連科学アカデミーに招かれて約二週間モスクワに滞在したが、中国への関心が高いときだけに、大変忙しいスケジュールで、幾夜かをボリショイ劇場のバレエ（アリセツカ主演の「アンナ・カレニナ」）、クレムリン大会宮殿のオペラ（「イワン・スサーニン」）、コンセルヴァトゥールの演奏会（ルーハのヴァイオリン、ギレリスのピアノ）などに興じたほかは、ついにゴリキー通りをぶらつく時間もないほどだった。

いささか閉口した私は、なんとなくロシア的世界から離れてみたかったこともあって、スケジュールの最後の二日間がフリーだったことを幸いに、エストニア共和国のタリンへ行った。往路はモスクワからアエロフロートの小型機で二時間足らず、帰路は一晚の夜行列車であった。

タリンは、バルト海に面したソ連邦エストニア共和国の首府で、天気がよければヘルシンキが海のかなたに望まれる近さにある。私にとってエストニア共和国についての知識は、リトアニア、ラトビアと並ぶバルト三国の一つであること、スターリンが独ソ不可侵条約の翌年、これらバル

ト三国を否応なくソ連に併合してしまったこと、タリンは美しい古い町でソ連のなかではレニングラード以上に西欧化された小都会であることぐらいであった。

果たして、タリンは素晴らしい都市であった。丘の上から一望すると、そここに教会の尖塔や丸屋根、城壁、古い街並みが建て込みながらも、全体が調和的で、屋根や壁の緑、茶、ベージュの色彩が美しい。町の中心にはドイツの商人に支配された十四、五世紀以来のハンザ同盟の商業都市の面影がそのまま残っており、広場の一角や小路の店並みはチェコスロバキアのブラハやタボールを思わせる。街行く人びとも垢ぬけていて、モスクワやレニングラードとさえ全く異なった風景である。雪が残っている枯れた冬景色がまた実に魅惑的で、なんでもない壁や小路がそのまま絵になっている。

プロテスタントの教会だという丘の上のキリク教会へ入ると、素朴な堂内ではあるが、老婆が二人いて蠟を灯し、たまたまパイプ・オルガンが「歓びの曲」を奏でていて、心の芯にまで響くようであった。ソ連にもこんなところがあるのかと驚かされたが、タリンには、ソ連で唯一の国際的観光ホテルといって遜色ないVIRUという名の立派なホテルもある。

このホテルはフィンランド人が建てたもので、お客の大半はウオツカに酔いにくるフィンランド人だという。私を迎えてくれたエストニア科学アカデミーの青年男女は、ゴージャスなムードのこのホテルの特別室でありつたの御馳走で歓待してくれたが、フォンデュの牛肉はやわらかくて、まことに美味であった。レモネードもタリンはソ連一ですよ、と彼らは自慢する。

エストニアはソ連の平均より二五パーセントも一人当たりの所得が高いとのことで、ロシア人



タリンの街並み

よりもすべてに進んでいることを彼らは自慢する。たしかに商品も豊富で良質であり、タリンで社会主義を発見することは一見困難なくらいだ。中国人がタリンにきたら「資本主義の復活そのものではないか」と見るだろうと言うと、彼らも笑って同感していた。

こうして、彼らはエストニアが現在、ソ連の各共和国のなかでもっとも西欧的であることを誇りにしており、エストニア語による「文化的自治」を強めて、むしろロシア人を見くだしているかのような様子が、一時の来訪者である私にもすぐに感じられた。

翌日、エストニア科学アカデミーの幹部たちが私を招いてくれたが、日本の科学技術、商品の質などを彼らは賞讃し、モスクワよりも日本との接触を切望していた。もとよりタリンには一人の日本人も住んでいない。ただタリンにはEXPO'70に日本へ来たヘイキ君というダンディな青年がいて、彼はずっと私を案内してくれたが、日本語がかなり出来、唯一人の日本通として生け花を教えているという。

ところが、このタリンで科学アカデミーの幹部たちが開口一番、私に発したのは、「周恩来の遺書をどう思うか」という質問であった。日本の影さえ右の程度で中国の影などさらさら存在しないタリンの地で、このような質問に最初から出会った私がびっくりしていると、二月十三日付のエストニア語の新聞『ラフヴァ・ハール(民族の声)』を探してきてくれた。見ると、紙面には大きく「Sankei Shimbun」 Zhou Enlai Kirjast」と書かれている。

私は「周恩来遺書」については中国当局が否認している記事が『サンケイ新聞』に載ったことを説明し、同時に『サンケイ新聞』について知るかぎりを紹介したのだが、右の「周恩来遺書」

については、タス通信の東京特派員が『サンケイ新聞』の記事をかなり書きかえてモスクワに送り、それをタス通信が大々的に流したことを、私はすでにモスクワで聞いていた。^{*}

この一例に示されるように、ソ連はいま日本の中国情報に大いに注目しているようであり、私が『正論』（三月号）誌上に訳出した鄧小平の未公開演説に関しても、尖閣列島問題は一時棚上げしているにすぎないのだという箇所を、『リテラトゥールナヤ・ガゼータ（文学新聞）』が二月四日付で早速引用していた。

ともあれ、私の短いエストニア旅行の道中で『サンケイ新聞』が話題になるうとは思ってもよらなかっただけに、この一件はタリンでの多くの驚きのなかでもひととき印象深いものであった。

——『サンケイ新聞』一九七六・三・一一（夕）

* 『サンケイ新聞』に載ったこの「周恩来遺書」は、ソ連のKGBによる情報工作であったことが、一九八二年末に発覚したレフチェンコ事件で明らかになった。

ボルネオ雑感

果てしなくつづくジャングルの暗緑色の平面を、ボルネオはサラワク州の主河ラジャン川は、まるで地理の教科書の見本のように蛇行している。マレーシア航空のターボプロップ双発機に乗っていると、高度が低いので、ボルネオの風光は手にとるようになるのだが、私は機内でいささか憂鬱であった。この広大な自然はたしかに素晴らしい。だがそれにしても、この地は一体、どこの国なのか。

もとよりサラワク州もサバ州も、行政的には今日、マレーシア連邦に属するのだが、私がボルネオ、つまり東マレーシアにおいてマレー人を見出すことは、むしろ稀だといっていいほどであり、原住民の大部分を占める海ダヤ族（イバン族）、陸ダヤ族以外はすべて中国人である。それも、クチン（サラワク州）、コタキナバル（サバ州）、サンダカン（同）といった都市になると、その住民は圧倒的に中国人が多い。

かつてサマセット・モームは一九二二年にボルネオを探訪して、『作家の手帖』のなかにサラワ